

先德餘香

南條文雄編集

○香嚴院慧然講師の書牘

大阪木村宗圓君所藏、上杉文秀嗣講錄送

疇昔者始焉貴宅へ御尋問申、得懇話、特更種々御饗應添、且結構成菓子一箱御贈惠、重々御禮難申盡候。昨日者藤兵方へ御傳語、自此方先可申伸之所、御報罷成候、此間御物語ニ付、寶王論周覽仕、飛錫師之教誡、今更感心不レ少候。頃日御物語申候通、小弟十七歳之時、於浪華光隆老師有語鉗之撰講之、其時列席聽講、一句も記得不仕候。向居士云、除煩惱求涅槃喻避形而覓影、離衆生求佛性喻默聲而尋響、予先是自號默聲、心外求法之愚漢之號、尤予本分ニ御座候、彌向後默聲と名のり可申候、出處懸望ニ候處、貴體之御考により、慥成釋義ニ見あたり、欣躍之至ニ御座候。且即シテ生無生、無生即往生ト、註論家之常談、若捨往生別求無生、亦默聲而尋響之漢而已、即シテ凡夫ルセ不退、亦同然乎。明日台致上京、夏滿可得再會候條不能縷々、此間之御禮如是ニ候、恐惶不宣。

首夏九日

默聲 惠然

謙老居士

座前

編者曰ク、右ノ宛名ノ謙老居士ニツキ、有人ノ説ニハ、「聞ク旭莊ハ泉州堺に學塾ヲ開キ居ラレント、此書牘ハ當時ノ往答ナランカ」トアレドモ、人名辭書ニ據レバ、「廣瀬旭莊ハ詩人ニ

シテ豊後ノ人、大阪ニ住ス、名ハ謙、字ハ吉甫、梅墩ノ別號アリ、淡窓ノ弟、龜井昱ニ學ブ、宜園百家詩編、高青邸詩鈔、梅墩詩鈔ノ著アリ、文久三年八月十七日歿ス、年五十七」トアリ。然ルニ慧然師ハ寶曆十四年正月十五日七十二歳ニシテ入寂セラレ、ソレヨリ四十四年目、文化四年ニ旭莊ハ生レシコトナレバ、謙老居士ノ旭莊ニ非ザルコトハ必セリ。然レバ其老居士ハ果シテ誰ナルヤ、博雅ノ教ヲ請フ。

又書牘中ノ光隆老師ノ語鉗ハ、幸ニ住田嗣講ノ藏書ヲ借覽セルヲ以テ、其一斑ヲ附記スベシ、念佛三昧寶王論語鉗上中下三卷アリ、自叙ノ終ニニ、元祿九丙子夏寓洛下光隆老衲書于臥雲閣之南窗トアリ、即チ光隆寺知空師ノ作ナリ。書目ノ鉗ノ字ハ、「玉篇云、カナバサミ、奇炎切、以レ鐵束物、又奴所着。康熙字典云、鉗^{クン}、唐韻、巨淹切、集韻、韻會、其淹切、並音辨、說文、鉗以レ鐵有所^ニ劫束也、从^ニ金、甘聲」トノ書キ入レアリ。卷末ニハ、「寶永六年己丑六月朔日、大阪北御堂前、毛利田庄太郎梓行」トアリ。此ノ寶永六年ハ慧然師十七歳ノ時ナリト知ルベシ。

大正八年十月二十日夜之ヲ記ス。

文殊菩薩讚

三世諸佛母、一切菩薩師、今在清涼嶺、導爾七寶池、

閑居

秋といへど月待までの隙をあほみけさをわするゝ山陰の庵

畫蘭
並書後

香月院深勵
雲華院大舍

蘭也令客幽、客亦令蘭幽、幽蘭與幽客、此中幽又幽、

戊子（文政十一年、舍師年五十六）仲春併題、爲慧澄尊者

雲華方外史

今茲丙午（弘化三年）、還自往士（江戸、東京）、逗留吉田（豊橋）管刹（別院）、一日訪正

琳（寺）、「觀扁於其堂」、如逢舊識人、乃重題爲他年之記、

七十四翁

正東山色帶春霞、地接天台路碨礧、三級飛泉如是水、千章櫻花爾時花、

二月小盡上若王子山

無題

高僧遙九命、雪手寫幽蘭、同心吾豈敢、寢比德香看、

岡崎や法の御影の池の月

蓮

花といふ花の中にも花はちす花の君たる花にぞありける

人に答ふるうた下半漢語を用てたはむれける

本法院義讓

世にすめるたのしみ人とはゝ萬事不_レ如_ニ一杯在_レ手

安政（二年）乙卯元旦試筆

瑞應院默惠

香山院龍溫

時下講堂思所親、晴雲千里一傷神、已聽黃鳥鳴東樹、且見梅花媚早春、日月光清王政灑、山河勢合霸圖淳、看々琴瑟逢多暇、寄語繁華都邑人

三大院香頂小栗柄氏

明治十九年賽日光東照宮

鬱々檜杉滿面生、中看丹籞倚縫巒、千年霸氣黃金色、八道春風大樹聲、靈象在空何物坐、群龍爭雨欲雷鳴、神君豫記維新夢、真日臨東照武城

題玄界渡天圖、文政五冬應需畫併作

八十一翁豪潮

大悲大願深於海、不惜捨投身命財、換骨七生憐五濁、法門八萬三千開、